

# 古志賀谷氏について

山崎善司

埼玉県越谷市越ヶ谷町は、古くは武蔵国騎西郡越ヶ谷郷といわれた。中世には如何なる人々が居住し生活していたのだろうか、越谷市に住む者にとっては誰もが興味ある事柄である。

私が中世の越ヶ谷郷に住したといわれる「古志賀谷氏」について、興味を持ち情熱を燃したのは、昭和四十三年頃からである。「越谷市の史跡と伝説」の大相模地区の項に「大相模二郎能高なる人物があり、今その後裔といわれる家があり家系図を所持している。その屋敷は、六〇〇〇坪からなり、構堀をめぐらし、文和三年、貞治六年、応永二十年、同二十九年、寛正四年、享祿三年、他年不祥の板碑が屋敷内に保存されている。また越ヶ谷地区の項には、「御殿の地に建長元年・嘉暦元年・貞和三年・寛正四年の板碑を見ることが出来るが、大相模氏の建碑と思われる」とあり、越ヶ谷の地は大相模氏の支配の如くに書かれているのを発見した。

私は子供の頃「昔々越ヶ谷には、越ヶ谷太郎という人がいた」という話を聞いたことがある。そ

の出所や証拠等は何もないが、その話が私の脳裏に残っており、越ヶ谷御殿の板碑が大相模氏の造立の如き書き方を見て、それでは越ヶ谷太郎の話をも、どの様に理解し説明すれば良いのか、と自分に問い掛けて見たことが、そもその始まりである。それより三年「越ヶ谷太郎」の話しを聞いた事がありませんが、知っている人はありませんか、と古老の方々に聞いて歩いたが、知る人がありませんでした。その内「越ヶ谷太郎が、越ヶ谷氏を称した人がおらねばおかしい。否、越ヶ谷氏が居住していたはずだ」と古書を猟り読みしたが発見出来ず時を過してしまった。ところが千葉県発行の房総叢書・千葉大系図・箕勾氏系に、次郎為基古志賀谷との文字を見つけた時のうれしさは何に例えようもない程うれしかったものである。然しながら、古志賀谷が越ヶ谷であるという証明が、これまた大変で、長い時間を要した。

昭和五十年三月越谷市史・通史一・一九六頁に、古志賀谷氏の項が記されたことで、古志賀谷氏を称した人のいたことが認められたことになる訳で、古志賀谷氏に情熱を燃した私としては、感無量である。そもそも古志賀谷氏の出自は、千葉大系図と野与党系図では少々違っているが、千葉大

系図に従って一記すると、人皇五十代桓武天皇に始まる。御子葛原親王・平氏を賜。高見王 高望王・関東に下向。その子良望(国香)・良将・良兼・良懸・良文・村岡五郎を称し、鎮守府将軍上総下総常隆介を兼任、天慶六年十二月十八日卒六十歳、この良文が、坂東八平氏の祖である。良文の子忠頼、陸奥守上総下総常陸介蒲任・寛仁二年十二月十七日卒九十歳。その子忠常 上総介武蔵押領預使・長元四年五月十五日卒・五十六歳・忠常の乱の当主である。平将門の天慶の乱後、武蔵押領使となり、武蔵全域に、その子孫が勢力を張る因となる。この乱の時忠常は源頼信の書に伏し之に降り頼信と共に上洛の途中美濃国蝉屋庄に於て病没した。此の子孫常大将・千葉平氏初代である。此の千葉平氏の中より野与一族が興り野与党として繁栄し歴史の中に名が出て来るのである。

野与四郎胤宗が野与に住し、野与を称し、野与党の祖と云われ、武蔵国騎西郡に跋扈して数代、武士団として歴史の中に野与党としての名が出てくるのは、源頼朝の旗拳の後、五代千葉常胤仕向する時千葉一族の中に野与党の名が見える。以後平家一門の滅亡までの一連の戦には、一方の主

戦力として軍功をあげている。

『吾妻鏡』の中に、道智・多名・多賀谷・渋江・箕勾・鬼窪 須久毛・八条等野与党一族名が各所に出て来る。また承久の変には、宇治川の合戦の戦死者の中に道智氏の名が見え、先陣を承つていことが解る。

これらの野与党一族の播居した騎西郡とは、東側は、北方は古利根川・南方は元荒川・中川と東京都の境迄、西側は、上流は元荒川、下流は、綾瀬川で東京都との境迄、埼玉東部の北西より南東にかけて細長く延びた地域で、現在の北埼玉郡の南半分・南埼玉郡を含む広大なる地域である。武蔵国騎西郡の地域内の地名で、『吾妻鏡』、『太平記』、『源平盛衰記』、『千葉大系図』、『野与党系図』、『新編武蔵風土記稿』、『栄広浄土寺清浄院由緒聞書』等に出てくる氏姓と同一と思われるものを記すと次の如くである。

道智 道地・多賀谷 内田ヶ谷・多名 種足・大蔵 三箇村旧名大蔵・萱間 柏間・野与 野牛・鬼窪 自岡・自岡 日岡城・黒浜 黒浜・佐那賀谷 実ヶ谷・江ヶ崎 江ヶ崎・金重 金重・箕勾 箕輪・渋江 渋江・神倉 加倉・柏崎 柏崎・須久毛 笹久保すくも・横根 横根・渋江

村国・野崎 野嶋・小曾川 小曾川・古志賀谷 越谷・大相模 大相模・西脇 西方・別府 別府・柿ノ木 柿ノ木青柳 青柳・大曾根 大曾根・八条 八条・小作田 小作田・等となる。

そしてそれら地名と人名とが一致する所には、館跡と覚しき痕跡・鎌倉南北朝期の板碑・寺院・八幡社・久伊豆神社又は前玉神社・神明宮と共通点を見出す事が出来る。また地形的にも、河川の曲折点にて洪積台地・津・戸・江等の名の付く地形、それに続く耕作に適する広く開けたる地形と同一条件の地形を見る事が出来る。即ち軍事的に有利なる地で河川、陸路交通の要地、そして居住に適し、耕作地が近接したる処等と一定の条件を選んで拠点としている点等何れも一致した共通点を見ることが出来る。

古志賀谷と越ヶ谷が同一であるという証明になるものは何もないが、騎西郡中にある地名と系図中にある氏姓名が同一であるものが争点見られ、越ヶ谷の他に古志賀谷に比定出来る地が他に見出せない以上、越ヶ谷の地が千葉大系図中に見る古志賀谷氏の拠点であると見るべきであろう。古志賀谷氏の館跡はどこにあったかということは、これまた文献・伝承共に希薄である。「越

ヶ谷瓜の蔓」に、袋町御蔵屋敷の隣に陣屋跡とあるが、何者の陣屋か相不分とある。然しながら此処の地形を古志賀谷氏の館趾とするには少々難点が多い。初期入植地と、安定期の分家入植とに分けて考えて見ると、初代為基 二代お重 三代

秋近の拠点として考えられるのは、久伊豆神社や天嶽寺の周辺を見ると、その隣地に越ヶ谷御殿跡地があり、この中間地点には、建長元年（一二四九）、貞和三年（一三四七）、寛正六年（一四六四）建立の板碑と、そして遺溝と水の取入口が見られるので、この御殿跡地が考えられる。三代目に至り、二郎信秋 四郎行勝が分家している。これらの地はどちらかは解らぬが、先ず越ヶ谷新町二丁目周辺を見るに、八幡社や澄海寺があり、八幡社は文和二年（一二五三年）の板碑を御神体として現存している。なお遺構の痕跡と水の取入口も見られる。

次に考えられるのは、四町野村（現宮本二丁目）の会田太郎兵衛屋敷跡である。会田家が中世より昭和の時代迄居住していたのでその遺溝は構堀として現存している。隣地に道を挟んで迎徳院（越谷山神宮寺）がある。この寺には改築の際、土中より発見された応仁元年の板碑を見ることが

が出来る。なお神明宮は隣接地ではないが、跡地は神明下村（現神明二丁目）神明橋辺の元荒川の川洲にあったが、今は痕跡をも留めないが、古来の伝承となつて残っている。この神明宮より迎攝院の門まで九〇〇メートルある。この社は近郷近在には見られぬ程立派な社であつた、といわれている。察するに柏間村（北埼玉郡）の柏間氏の神明宮は参道が一三〇〇メートルあり、越ヶ谷の久伊豆神社の参道が七〇〇メートルあり、天嶽寺の山門と久伊豆神社の参道の入口が並んであることからして考え合せ、迎攝院の山門と神明宮の参道とが並んでいたと考へても不思議はないことになる。

現在の元荒川を航空写真で見ると、今よりも北越谷一・二丁目辺を流れていたことが判る。現在北越谷一丁目の土手寄りの地は堤外地となつている。またこの神明宮の周辺の村落には現在も獅子舞とお囃子連と御神楽等の伝統を良く保存しており、関東切囃子連中第一である。東京都神田明神祭や浅草三社祭等には、これら神明町周辺の村落の御囃子連が必ず出張している。これらにより神明宮に関する伝承が正しいことが分る。

以上の如き痕跡のみにては、明確なる立証にはならない。今後共皆様方のご助力により今一つの

資料・物証の発見が望まれる次第であります。

以上、古志賀谷氏発見の顛末を記しましたが、古志賀谷氏の館趾、事蹟、没落等々不明なることばかりであります。今後の古志賀谷氏の研究の手がかりともなれば幸いです。